

平成26年度第3回千葉市文化芸術振興会議議事録

市民局生活文化スポーツ部文化振興課

1 日 時

平成27年3月11日（水） 午前10時～12時

2 開催場所

千葉中央コミュニティセンター8階 会議室「千鳥・海鷗」

3 出席者

（委員） 神野委員、早川委員、椎原委員、瀬崎委員、林委員、古川委員、大澤委員、竹下委員
（事務局） 生活文化スポーツ部長、文化振興課長、文化振興課長補佐、文化振興班主査、
主任主事3名、（公財）千葉市文化振興財団課長2名

4 議 題

千葉市文化芸術振興計画策定に関する基礎調査報告及び骨子（案）について

5 議事の概要

千葉市文化芸術振興計画策定に関する基礎調査の報告をするとともに、それを基に作成した骨子（案）について意見交換を行った。

6 会議経過

【神野委員長】

みなさま朝早くからお集まりいただきましてありがとうございます。それでは、議事の方を進めたいと思います。これから今日やることというのは、千葉市の文化芸術振興計画が新しく策定されていくにあたって、非常に重要な骨子案、骨組みを考えていく、という内容になります。非常にここをしっかりとっておかないと、そのあとの計画そのものが意味のないものになりますので、今日は骨子案ということで、みなさんからご忌憚のないご意見をいただければと考えております。それでは、あまり時間ありませんので、さっそく議事の方に入りたいと思います。まず議題の「千葉市文化芸術振興計画策定に関する基礎調査報告及び骨子（案）について」やって行きたいと思います。それではこちらの議題について、事務局の方から説明をお願いします。

<事務局説明①>

【神野委員長】

ありがとうございました。

非常に膨大な調査のデータを基に、色々整理していただいているので、まず全体を理解することから、時間がかかるかもしれないんですけども、ちょっと整理をしますと、まず文化芸術振興計画の策定に関する調査を基にして、千葉市が重点的に取り組むものはどういうものであるべきかということを検討していくと同時に、千葉市のマスタープランに沿って、市の施策として考えられるものということの柱を立てて、それを両者すり合わせる形によって、資料4の全体像というものが骨子案として示されている、ということかと思えます。

まず最初に、その市民意識調査をベースにしたものの整理、そしてマスタープランとのすり合わせというか、どう組み合わせるかというところで、出てきた骨子案全体について、ご意見・感想をいただけたらと思います。ご忌憚ないご意見をよろしくをお願いします。

【大澤委員】

最初の全体的な部分なんですけれども、前から言っているように、市民が参加する音楽芸術と、プロが発信してく文化芸術というものが混同されていて、結局いろいろな施策が遅々として進まず、分散してしまって良い方向に千葉が行っていないと私はいつも思っているんですけども、これも全部混ざっちゃってるように私は見えるんですね。私のイメージとしては、（三階層の図で一番上を「①プロ」、真ん中を「②体験」、下を「③参加」と定義）文化芸術っていうのは、③が、市民が参加して、自分が趣味として楽しむ領域であって、①に本物というか、いわゆる伝統的なプロというか、素人がまねできない、本当の領域の芸術というものが①の部分にあって、それを体験して還元するという経緯が②にあって、③で市民が自ら楽しむ領域があると思っているんですね。ですから、行政が出していく方向って、①の部分で何をやる、②で何をやる、③で何を市が働きかけていって、三つ、もしかしたらもっと多いかもしれませんが、こういうイメージなんですね。なので、それが今全部混ざっちゃっているの、市民が参加して充実して支えるのか、プロがそこで活動していくことによってなのか、つまりアンケートの中でも問17、27ページのところで、「あなたは今後文化芸術を振興していくために、千葉市において特にどのようなことに力を入れてほしいと思いますか」という質問の中で、「市民が気軽に文化

芸術に親しむことができる身近な催しの充実」というのが1位になっているんですが、これがじゃあどういう意味なんだろうといったときに、気軽に親しむということが、例えばプロのとか本物の芸術に気軽に親しめるのか、自分が自ら参加することで親しめるのか、一緒になっちゃってると思うんですよ。回答する本人としてみれば。その次のところで、2番目「博物館や美術館、音楽ホールなど、それぞれの特色を生かした質の高い事業の開催」これが34.5パーセント、これは明らかに本物がちゃんと見たいよということなんですね。なんだけど、その上の質問というのは、親しむことができる身近な催し、今千葉で大きく開催されているものっていうのは、市民が身近に、例えば合唱だったりとか、ミュージカルだったりに参加して、自分が発表してっていうところも含まれていると思うんですね。だからこういうような形で、その部分はきちんと分けていって、この資料4の骨子も、もう少し分け方があるんじゃないかなと思います。さらに言うと、骨子の資料4で、「広げる」「育てる」「支える」「つなぐ」「活かす」ってあるんですけど、プラス、千葉市が今一番ないものというのは、オリジナリティでありつつ、質の高い、本物がきちんとやっている、都内とかそういったところで質の高い本物が見られるから千葉はいい、っていうそういう雰囲気があるんですけども、これはできれば芸術文化の質を高めていくことで牽引していってほしいと思うので、活かすのもそうなんですけれども、牽引して引っ張っていって、向上する、一番上のプロの本物の部分に牽引をしてもらいたいと思うんですね。その牽引があつてこそ、スパイラルで、下の市民からも何からも芸術文化が向上していく。相乗効果で上に誰かが引っ張っていかないと、千葉市らしさの特徴としてのオリジナリティというか、千葉だからこそっていうのが出てこない、そうするとそこで市民は、ただ自分たちの楽しい活動の場があるからいいやだけで終わってしまう。それは市ではそこではなくさらにその上も目指してほしいなという風に私はイメージしています。

【神野委員長】

今大澤委員のほうからご指摘があったことというのは、市民にとっての芸術というものの自体がどういう風な設定になっているのかという事だと思います。要はハイカルチャー、ハイアート、という高級な、高度な専門能力をもった人たち、それを芸術として設定したときに、それを広く支えられる社会にしていくための全体の構造であるべきじゃないかという風に私は理解したんですけども、いかがでしょうか。それについてのご意見等。

【椎原委員】

問17のアンケートでは、「市民が気軽に文化芸術に親しむことができる身近な催しの充実」が一番上位であり、それに基づいた基本施策の提示なのですが、しかし、2番目の「博物館や美術館、音楽ホールなど、それぞれの特色を生かした質の高い事業の開催」も、34.5%もあり、結構上位なわけです。そうすると、市の基本施策ではアンケートの2番目の意見が薄れてしまっているというように感じます。その点では、大澤委員のご意見に同意する部分はあります。問14を見ていただくと、「千葉市は文化的なまちだと思いますか」という質問に「あまり思わない」というのが45.2パーセントですが、「思わない」と足すと59.3パーセントなんです。ここでは「あまり思わない」も「思わない」も一緒に数えないといけないでしょう。45.2パーセントの「あまり思わない」は結構曖昧な回答かもしれないけど、「思う」と「やや思う」を二つ足しても28.5パーセントですから、文化に対しては、半数以上の人は千葉市のイメージとしては低いと思っていること、そこにある種の危機意識みたいなのところがあるかもしれません。あと、問15の文化的なまちのイメージにある、「歴史があり伝統文化が受け継がれて

いるまち」ですが、千葉市の状況を考えれば大賀ハス、加曽利貝塚、千葉寺と挙げてもそれは京都や金沢とは比較にならない。最近では近代化産業遺産といった別の視点があって、川鉄（現JFEスチール）の工場を、文化遺産として考える可能性はあるかもしれませんが、やはりベースは自覚しないといけない。その上で「文化的なまち」をどのように構築すべきか？そのためには歴史文化に弱いまちは、何かしら起爆剤になる新しい文化を前面に押し出すしかないのではないかと、このアンケートから私は思いました。

【早川副委員長】

全く同じ考え方です。我々はいくら自分の欠点を明らかにしたくないという本能的なものがありますから、文化的な都市かどうかというと、ほとんどの方は、本当のところはあまり千葉市は文化的でないよと、こう思ってるんだと思うんです。しょうがないかな、そういえないこともない、っていうこともあるんだけど、本当のことを1対1で聞いたらダメと言うに決まっています。それから、伝統文化を維持しようとして書いてありますし、文化都市っていうのは伝統とかそういうものがあるまちだ、と書いてあるんで、このアンケートを付き合わせて見ていくと、千葉市にはそういう伝統文化がない、ないから文化都市になるためには、文化的な遺産を掘り起こしたりしなきゃいけないと、こういうことになっているんですね。ですから今のご発言のとおり、そういうような状態で千葉市の文化芸術振興計画っていうのはどうやったらいいかって考えないと、文化的な都市だから、さらにそれをどう伸ばすかって議論しても無理だと思うんですね。これはなにも市民にハッキリ言う必要はないけれども、計画を作るときは本当はかなり低い水準から上に昇って行くよと、こういう風に議論をしていかなければいけないと思います。そうすると、最初のご発言も、おのずとひとつの方向が出てくるという風に思いますね。最初千葉市の文化芸術振興計画はどこへいくか、一気に世界的なアーティストを育てるようなところにポイントを置くのか、それとも幅広い文化芸術に親しむ人を少しでも増やしていくかとか。全部やるんでしょうけど、どこにポイントを置いていくかで焦点が定まってくるのではないかなと思います。まず現在のところの認識を同一にしておく必要があると思います。

【神野委員長】

ありがとうございます。これは以前の振興会議の中でも話題に出たかと思うんですけど、東京と同じことをやってもとてまかなわない、かなうはずがないので、じゃあ千葉らしさは一体なんなのかということがずっと議論されてきたんですけど、なかなかそれが深まって行かないところがあって、今回アンケート調査の中で出てきたものの中で、これは一般的な質問として文化的な都市というのはどういうイメージかと言われた時に出てきたものであって、これは千葉を想定しているわけではないんで、それは千葉には現実にはないですよ、ということがある以上、そうではない何を作っていくかということを考えていくとか、そういう風に現状を認識した中から作っていくべきだろうということかと思えます。

その時に、どこに絞ってどういう風に見せて行くのかということが非常に求められているということが、事務局から、最初にどこにポイントをしばって行くのか、ということがありましたけれども、そこに繋がっていくだろうなということですね。

そのときに、先ほどの大澤委員の、十分整理されていないんじゃないかというご指摘もありましたけれども、おそらく事務局のほうでも、ハイカルチャー寄りのものすごくいいものをということは、そこは千葉が求めるものではないだろうということがコンセンサスとしてあるという前提だったかと私は理解しております、そこが生まれてくるのがこの先ないとはいえないけれども、まず現状でやるべきな

のは、たとえば何かを聴きに行くとか、誰か身近な演奏者を知るとか、どっかに出かけて行くとか、そういう生活の中での自分たちの主体性、参加しようとする主体性というのをどう育てていくかということに注目をしようとしているんじゃないかなという風に私の方では解釈しております。その時におそらくは子供、若者というところに重点を置くべきではないかと。その時に、それをこの全体の中にもういう風に位置づけていくべきなのかということと、ちょっと決めかねているので、皆様のご意見をお伺いしたいということなのかなという風に私の方では解釈しております。

大澤委員の最初のご提言も非常に大きなテーマなんですけれども、とりあえずそこは今早川委員のおっしゃったような形でちょっとその前の段階で、千葉市がどういう現状認識をして、次のステップとしていくべきかっていうところに焦点をあてて議論をしていけたらなと思いますけれども。みなさんいかがでしょうか。

【竹下委員】

私も大澤さんのおっしゃる、問17の「気軽」という文句にだいが引っかかりまして、気軽というのはどういうものなのかと。大澤さんがおっしゃるように、プロを気軽に聴きたいのか、自分が気軽にやりたいのかよくわからないところがあって、これは47.1パーセントの方がお答えになっているんですが、中身は何なのかはもう少し掘り下げないとよくわからないなという感じがしました。大澤さんから馬鹿にされるかもしれないんですけど、私は千葉市の所在地、東京まで電車で1時間で行ける、そこが持っている財産はものすごく大きくて、たとえば印象派の美術展を考えると、それは東京でやってもらったらいいと思います。印象派ではなくて、千葉市の美術館がやるべきは別の角度であって、千葉市の美術館らしいものを今発信しておられると思うんです。だから千葉市の美術館はそれなりの知名度と人気があるんだろうと思うんです。が、そういう形で、東京と同じことをやったってだめなわけで、確かにプロの演奏やプロの演劇みたいなものもなくてはならないと思うんですが、東京への地の利が千葉市の優位点の一つなら、東京でやるイベントについては東京にお任せして、千葉市は別の角度の芸術なら芸術、プロの芸術というようなものを育てていくべきかなと思っています。

このアンケートで不足しているのは何かって考えると、このように市民や青少年、若い人たちのご意見をお聞きして、それに対してでは受ける側、受ける側というのはたとえば美術館、加曽利貝塚の学芸員かもしれない、あるいは文化ホールの支配人というか、そこで仕事をなさっている方々、あるいはもっと地域的に考えれば公民館の公民館主事という方々ですが、そういう方々がこの意見をお聞きした時に、「私のところであればこういう風に工夫ができる」、「こういう風な形でこの意見を活かすことができる」、あるいは「これは私のところではむずかしい」という意見が出るかもしれない。そういう文化芸術の最前線でプロとして働いてらっしゃる千葉市の方々が、どういうご意見が返ってくるということを、是非私はお調べいただくか拝聴したいと思いました。ここには色々な貴重なご意見が網羅されているわけですから、そういう感想を持ちました。

もうひとつ欠けているのは、公的な施設ではなくて、企業が持っている、あるいは団体が持っているホールや器の活用です。それらをどんなふうに活性化していくかということは、もう一つ大きなテーマかなという風に思います。素人ですから私なんぞはそういうものが千葉市にどのくらい、どの程度広がって存在するのかというデータがないものですから、そうした資料をお示しいただければ、それらも千葉市の財産の一つとして活用しながら、文化芸術を広げていくことが求められていると思いました。

【早川副委員長】

今のご発言との関係ですが、やっぱり世の中がだいぶ変わってきてるんで、そういう事も考えなきゃ。アンケートの中で、広報活動は何が良いですかっていうと、ICTっていうか、いわゆるインターネットとかあいうもので広報したほうが良いと言う若い人は圧倒的に多くなってる。これは実際の具体的なやり方としても取り入れていかなければいけないんですが、もう一つ、今千葉市の文化連盟というのをお手伝いしているんです。これはいろんな団体の集合体ですから、たとえば茶華道協会っていうのがありますが、茶華道ですから、お茶とお花ですね。これは裏とか表とか、色々な流派のお師匠さん方が集まって、茶道協会をつくっている。それからお花でも、なんとか流ってのがあるんですか、そういう色々な流派のお師匠さんが集まって、茶華道連盟となってるんです。やっぱり昔と違って若い方々がどうしても少なくなっているようです。だから会員が増えていくっていう傾向が見られないんです。一生懸命努力はなさってるんでしょうけども。昔は、差別って言われたら困るんだけど、お嫁入りの前はお茶を習うとかお花習うとかやっていたんですが、今はあんまりそんなことなくなっちゃってる。そういう社会的な情勢の変わりようも今後考えていく必要があるかと思えますね。

【大澤委員】

誤解されてるかもしれないけどもう一度言いますけれども、先ほど言った一番上のところは、「東京のまねをする」とは私言っていないんです。というのは、いまおっしゃったような茶道とか華道とか、そういったものもちゃんとプロの方がいて、お師匠さんがいて、千葉に芸術家はいるんです。その方々がきちんと牽引して引っ張るっていう、そこをきちんと明確に支援をすべきではないかと言っている。そうすることによって、下のほうにも伝わっていく機会が増えて、やっていく若い人たちが増えていく。だからやはり、上がきちんといるということ。千葉での話しです。東京の話ではないです、東京のまねをすることではないです。千葉にいるプロや芸術家の人たちがきちんと認められる社会であって、それがきちんと牽引することが、下の人達にどんどんいい影響を与えるということ。たとえば、サッカーにしても野球にしても、スター選手がいるから、子供たちはあこがれてそれをやってみようと思うわけですね。それはどの芸術の分野でも全部一緒で、この人のこれが素敵だからやりたい、って子供たちは思うわけなんですね。そういう千葉市で一流の方たちがいることにもうちょっときちんとスポットを当ててあげてほしいと思っていて、そうするとその方々が千葉にも愛着を持ってくださいますし、先々の話ですけれども、移住しない。前も言いましたけど、千葉に住んでいる芸術家はみんな東京とか神奈川、埼玉に移住してしまう。どんどん人口が減って行って、結局どうしてかっていうと、千葉でそれをきちんと認めてもらって活動ができる地盤がないんだと思うんですね。それはすごくもったいないことだといつも思っているんで、その部分で一番上のトップの部分、これが牽引して向上していくことを引っ張ってってくれるということが大切だという風に思っている。それは東京のまねとかでは全然ないです。千葉のオリジナリティを出していくという意味では、いまそこにいる芸術家たちをきちんと評価するということだと私は思っています。

【神野委員長】

今お話を伺っていて、東京のまねをするというわけではないっていうのは理解できました。東京はひとつのたとえでしかないんですけどね。私なりに整理をさせていただきますと、「気軽」という言葉が非常に曖昧であるということが指摘されましたけれども、じゃあ市民の側に、「気軽」って、具体的に、本当はしたいのにそれがない、ってどこまで考えてるかっていうと、それもそんなに現実的には考えていな

いってことだと思っんですね。ただなんとなく敷居が高いなというくらいだと思っんですね。この「気軽」というのは、文化施策を考えて行く側が「気軽」の中身を定義するということは、私はできるしすべきなのではないかと思っんですね。たとえば、大澤委員がおっしゃるような、千葉に住んでいる一流の演奏家、あるいは表現者ですね、そういうような人たちを身近な存在として、あるいは気軽にその人たちの世界を知るといふようなことのためのインターフェイスみたいなことを、例えば千葉市の文化ホールはいつも考えていて、東京では体験できないコンサートが体験できる、あるいは先ほど竹下委員のご指摘の中に千葉市美術館の話が出てましたけれども、非常に示唆に富む発言だったと私は思っっていますけれども、要は千葉市美術館が近世絵画に特化をして、きちんと研究をふまえて展示をしているということが、確実に支持をされているわけですね。これは美術館としての非常に真っ当なアプローチで成功した事例だと思っます。その気軽さ、インターフェイス、どうやってつなげるかということだと思っますけれども、そこにもしかしたら千葉らしさというものを設定できるんじゃないかなという風な意見でした。そこらへんでまた皆さんのご意見を伺いたいと思っんですが、いかがでしょうか。

【椎原委員】

たぶん音楽の領域がちょっと弱いような感じがします。東京フィルハーモニー管弦楽団が千葉市と提携して、市民会館でも先日コンサートを行いました、なんとなく千葉市定期演奏会とはいえ、それはコンテンツを「買ってる」わけです。自分たちから文化を創っていく、クリエイティブな意識というものといった感じがしない。独自性を持ったものを作り上げていくというようなことを、どのように音楽や演劇の領域で考えられるかということなのではと思っます。一方、美術館は予算も限られていながらも、いろんな美術館と提携しながら、優れた企画展が開催されています。そこでは、学芸員の力が大きいと思っます。市民会館とか、あるいはそれを運営している財団には、優れた企画を創っていく人材があつてこそだと思っます。問題は、創造型の劇場に変わっていくのかといった意識、無論、そのためにはそれなりの予算措置も必要ですが、それは運営の根本問題です。資料2には「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が提示されていますが、この法律の精神のなかには文化を創造していく方向性提示されています。つまりハードじゃなくてソフトを創っていく能力が重要です。それは基本施策1の「文化芸術に親しむ裾野を広げる」ではなく、基本施策2の「文化を創造する人材を育てる」の部分を意識すべきです。世の中を見てみると、創造型劇場は県レベルでやることが多いです。たとえば静岡県の静岡芸術劇場（SPAC）とか、あと神奈川県も神奈川県芸術劇場や神奈川県民ホール、神奈川県立音楽堂などがあります。先日、神奈川県立音楽堂では、素晴らしいヴィヴァルディのオペラ公演がありましたけれども、それは、相当の企画力があるからこそでしょう。だから、今指定管理になつてる財団がどのくらい指定管理でいられるかわかりませんが、財団がどれだけ優れた人材を有しているかということに尽きるかと思っます。

【大澤委員】

私も同じことを感じていて、今骨子がありますけど、じゃあこれは誰がどうやって動かすのか、担当部署がきちんとあつて、そこでこれに専念して、専念しなければできないくらいのエネルギーと経験と色々な情報と知識がないと、芸術音楽とかそういったものって動かしていけないんですね。すごくマネジメントが大切で、今おっしゃったように、千葉市文化振興財団が今日いらして下さつてますけれども、財団が今度、指定管理者の新しい公募になって、財団がいまどうなるかという状況で、また熊谷市長が、指定管理者というものと、いわゆる建物を管理するという財団ではなく、それを切り離そうという

風な動きで熊谷市長は考えてらっしゃるようなんですけれども、自分の居場所というか活動する場所がない中でそれをやっていくには、じゃあ今この骨子になっているこれを財団が全部一手に引き受けて、その部分を細かく担当の方を付けてやってくださるのか、というようなことも含め、もし財団が全部を担うんでないのであれば、今おっしゃったようにマネジメント力がすごく大切なので、そういった部署を市で置くのか、どうするのか、っていうところにすごく大きくかかる。先ほど言ったように、一番上のプロとか本物、さっき言ったような牽引するところのマネジメントと、それを市民や何かに伝えていく、体験や伝える、触れる機会を作るというその部分のマネジメントと、さらに市民が自分で独自に楽しんでいく場を広げていくという意味ですね、そのマネジメント。その3つの部分のマネジメントがきちんと機能することで、千葉の文化というのがすごくいいものに発展していくんだと私は思っています。ですからマネジメントがすごく大切だと思います。千葉市はその辺どのように考えていらっしゃるのか。

【早川副委員長】

ずいぶん市長のお考えをよくご存知のようで、私は初めて聞いたんですけれども。例えば、千葉市の文化振興財団の目的っていうのがあるわけでしょ？私が聞いてる限り、あんまりそういう部門は、仕事の目的の上のほうには入ってなかったような気がするんですけどね。それから美術館の話が出たけれど、美術館は、教育振興財団が作ってるんですよ。だから教育振興財団が、どういう風に美術館を運営するかっていう考え方を持つんじゃないかと、美術館がそういう考え方を計画する。だから千葉市の振興財団っていうのは企画とかそういうものが主要な目的に入ってなかったんじゃないかと思う。だから入ってないのにやれ、やってないって怒ったって、これは言われた方が目をぱちくりしちゃうんじゃないのかと、こういう風に思います。だからそれを考えるのが、千葉市の文化芸術振興計画だというのが私の受け止め方です。もし文化振興財団が何もやってないっていうなら、いろんなところで批判して、お前ら何もやってないって批判すればいいんじゃないですか。

【大澤委員】

結局今美術館がうまくいってるのは、学芸員っていうプロの方が、絵画芸術の方はそうですよね。学芸員っていう資格を持った人がいますよね。でも音楽とかそういったものってそういう資格がないんですよね。そう考えると、そのプロフェッショナル、学芸員であればいろんな美術関係のことを勉強したうえで、こうあるべきだ、だから千葉市はこれをやろうっていうって、美術館はうまくいってるんだらうなと思う。

【早川副委員長】

今の発言だと、じゃあ音楽振興財団っていうのを作るかどうかって話になっちゃうんですよ。そういうのは今ないですね。だから千葉市の文化芸術振興計画としては、音楽に力を入れようと思ったら、そういう部門を作って美術館に相当するような組織を作ってやってもらうとか、そういう発案をしてもらえばいいんじゃないかということになる。

【神野委員長】

構造的な問題として、これは昔から言われていて、美術館は博物館法によって学芸員が専門職員として置くことが一応義務付けられているんですよ。一方で音楽ホールはそれが義務付けられていないという

ところで、専門性というものを育むことが困難であった、ということ。これは構造的な問題としてあって、その中で、法律が、劇場法なんかが制定されることで、それをもっとどういう風に活性化していくのかということが問われているんですね。今のご議論を整理させていただきますと、椎原委員がおっしゃったように、ここに書かれているってということってというのはどれも否定できないことであることは確かかなんですよ。それを実行性のあるものにするためには、いやもっと手前のところでそれを誰がどのような形でやるのか、これは大澤委員もおっしゃってましたけれども、そこが大事になってくると。その時に、現場の方たち、これは先ほどの竹下委員の方からもご指摘がありましたけれども、現場の人がどう捕えているのかということがこの調査の中ではちょっと見えないですよ、ということがありましたけれども、実際に現場をもって進めて行く人たちが必要なわけで、そこにこれらを実現するためのマンパワーがあるのか、あるいはマネジメントをしていくような人材がそこにはいるのか、ということも同時に問わなければならない、ということがご指摘されたかと思います。その時に、たとえば財団の法的な根拠というものがうたわれていると思いますけれども、時代が変化し求められていくものが変わっていく状況の中で、それがうたわれていないのだとしたらそれを求めるのは酷であるし、現実にもそぐわないわけですから、そこらへんも含めて見ていくべきだろうと。文化芸術振興計画自体がそういうものに対しても影響を持ちながら、新しい時代に合った、現場も働きやすい、あるいはお金もかかることでしょうし、そういうような形で、全体的にこの計画が実現される方向にいくというような計画でなければならぬのではないか、という風に私の方では整理をいたしました。さていかがでしょうか。

【古川委員】

指定管理者制度については大問題がいろいろとあるようですので、ここで話してもあんまり意味がない話なのかもしれないんですけど、それとは別で、今の流れの中で、芸術家の発掘と育成の部分で、どういう形で関われるのかっていうところになると思うんですけど、現実問題として、例えばこの間議場コンサートに出たハープの、あの方たちって千葉市民、特にお年寄りにすごい人気があるんですよ。正直びっくりするんですけど、何かのイベントに彼女たちがゲスト参加すると、それを聴きにきた、講演会を聴きにきたんじゃないかってそれを聴きにきたっていう方が相当いるとかっていうので、あれって千葉発でできる人たち。それから多分みなさんご存知ないかもしれませんが、蘇我のコミュニティセンターで女性の落語家が月1回、必ず講座を開くんですが、その方はまだ二つ目でこれからの方なんですけれども、そこで自分が教わった新作を必ず出す、試してみる場所として、蘇我のコミュニティセンターを使っている。その方は残念ながら千葉市在住ではないんですけど、千葉市の施設をそういう場に使っている。そういう方たちが実際にいるんですよ。そういう方たちがいるという情報をどこから捕まえてくるかは難しいんですけど、そういう方たちを育ててこそ、千葉発のアーティストになるんじゃないかなという気はしますので、こういう形で案を作ると、具体的にそういう人たちを拾って表に出すというところまで突き詰めるとすごく難しいような気がするんですね。それをどういう風に作っていけばいいのかな、っていうのをちょっと。両方とも最近の話なので、実感して思ってます。

【神野委員長】

すでにユニークなあり方をしている表現者がいて、それを千葉らしさという風に位置づけることも可能なのではないかと。それをどういう風に拾って行って、こういう中で目に見える形にしていくのかということも課題としてありますよね、ということですかね。

【大澤委員】

財団ではアーティストバンクというのをやってらっしゃって、そこに登録して、千葉市で活動している人たちはいて、それを財団さんが定期的にホールで披露する機会を作ってはいらっしゃる。

【古川委員】

アーティストバンクはそれこそ私は散々取材してるので、よくわかってますけれど、アーティストバンクについては、私は非常に順調にしているんじゃないかなという風に思ってます。あれはあれで非常に効果があると思ってます。あれはそのまま進めて行けば。ただ、あえて言うならば、もうちょっと大きい目標というか着地点というものを想定したうえで考えて行った方がいいのかなっていう風な感じは正直してます。たとえば個々に活動されているのが増えているのは間違いないんですけど、じゃあ一堂に集まってひとつの祭典みたいなものっていうのはできないのかなとか、そういうのは正直思うところはありますよね。

【大澤委員】

もうひとつ、アーティストバンクはまだ作ってから数年ですよ。これからの若い人が多いというか、プロとしてやってる人もいますけど、いわゆる全国規模でも第一線で活躍しているような方がなかなか登録しにくい雰囲気があるっていうんでしょうかね。なんかアーティストバンクがすごく曖昧な存在で、セミプロから上、みたいなので、この人たちがいるけど自分は登録していいのかなっていう本当のトップの人達が結構いっぱいいる可能性はある。なので、そのちゃんとした着地点というのがきちんと明確にあって、もうちょっときちんとすると、そういう人たちも登録してくるのかなと思ったりもします。

【神野委員長】

アーティストバンクじゃなくても、財団の方で当然把握している階層の表現者たちもいるわけですよ。だからそこらへんは多分、ホール、財団の主体性の中で、先ほどの古川委員の最初の話に戻ると、そういう表現者が市民と、自分の表現を通して接触する機会のユニークさっていうものが大事だっていう事だと思うんですね。アーティストバンクは非常に良い取り組みで、財団と、あるいはホールという時に、ホールはホールに人が来てもらってなんぼで、財団はもうちょっと広い目的を持っていてっていう中で、財団の中ではそういうことも視野に入れたいとか、あるいは財団以外の団体でもそういうような利用を模索していくような、それを市がある種、いろんなあり方があるんだっていうようなことを見せていくと同時に、そういう出会いというか表現の場所についても色々意見がありましたけれども、そこらへんの可能性みたいなことっていうのも、サポートできるような、っていうことも大事なのかもしれません。ちょっと若者や子供についてのご意見というのが今のところあまり出ていないんですけども、そこらへんも全体の中でそれをどう位置づけるかという話だとは思いますが、現状、千葉の中で、国の補助金を使って本物の芸術体験事業とか、そういうことを学校でやったりとかですね、そういうことはやられてるとは思いますけれども、そこらへんで皆さんのお考えがあれば。

【早川副委員長】

邦楽邦舞文化協会でしたっけ、それが市の教育委員会の指導の下で毎年定期的に学校を変えて伝統芸能、お琴だとか三味線だとか、踊りだとか、そういうものを行っている。今は文部科学省が定めたカリキュ

ラムの中に日本の伝統芸能を組み込みなさいという、そういう指導があると聞いていますが、その前からその活動をやっているんです。そういう子供と接する機会というか、むしろ教育の分野に脚を突っ込んでですね、入り込んで、教育しているという団体もあるわけなので、まるっきりそういう兆しがないということではない。むしろそういうものを支援するというか、そうしてやればいいのかと思うんですね。動きが出始めてるというか、出てますから。それをもうちょっと広げるとか幅を広げる、そうしていけばいいのかと思います。

【大澤委員】

この間文化庁のホームページをちょっと見ましたけれども、今おっしゃったようなものを、国が助成をしながらやってくれるっていうものが、去年くらいからですかね、具体的に動いているんですが、それが国に申請を出せる団体というところを見ると、教育委員会とか、市だったりとか、そういうものなんですよ。公のものなんです。私たちレベルの者は申請を出せないんですね。ですから、教育委員会とか財団とか市がそういったことをやるって決めれば、そこに申請を出せば、学校何個かにそれをやらなくちゃいけない、1個じゃダメ、っていう、そういう風なことが書いてあったんですけども、そういうことがあるので、財団さんも、もうちょっとそういうことにアンテナをいっぱい張ってくだされば、申請を出すのがまたすごく大変だと思うんですけど、いくらでも国からの方法はおりてきてますので、手段はあるとおもいます。

【神野委員長】

アンテナを広げて、いろんなものに利用できるものはできるだけ利用していくべきだと。その時に今うかがっていて思ったんですけど、マンパワーの話がさっき出ましたけれども、たとえば財団があって、財団だけでやるというのなかなか大変だと思うので、たとえば大澤委員のやられている団体と、財団がゆるく連携できるような形で、小さな組織では出せないけれども、財団が中心になって出して、実際に動くときにはそういう現場でいろんな活動してきたところと連携してというような、そういうこともこれからの時代には求められるような気もするので、そういうことも、こちら辺の中に入れられるような気がしますので、できるだけ分厚く、利用できるものは利用して、というような方向で新しい時代を切り開いて行けたらいいんじゃないかと思うんですけど。

【大澤委員】

その、活動している団体を、先ほどの芸術家もそうですけど、ピックアップしてくるのが…古川先生が言ったように。

【早川副委員長】

実際もう何年もやっているわけですから、財団は一切関係してないんですよ、それにはね。教育委員会、教育長とやっているわけですから、大澤さんのグループもやろうと思ったら教育長と話して予算をもらうなりボランティアでやるなり、そういう風にしていかないと、どっかに頼んでやってくれってやると一向に、それこそ文化的な活動って言うのは広がっていかないのではないか。

【神野委員長】

前にアイデアではあって実現はされてないと思うんですけど、一緒にやるための、なんかこう、いろ

んな団体が集まって、連携できるようなことを模索するようなミーティングみたいなものもあっていいかもしれないですね。

【椎原委員】

事務局にお伺いしたいのですが、県との関係はどのようになっていますか？私は、神奈川県文化芸術振興審議会委員やってますけど、横浜市との関係が問題になります。お互い文化芸術の振興をやっていて、市は市、県は県で、それぞれの事業をやっていきます。県は、全県での事業を意識しますが、とはいえ、横浜は神奈川県の文化の中心であり、外から見ると県の事業なのか、市の事業なのかはわかりません。そこで、県は市の情報も含めて全て公開する方向でやっていきます。一方、千葉市の文化振興財団のホームページをみますと、県の財団の事業が見えてきません。やはり千葉で文化的って言った時、千葉県文化会館の市は結構大きいと思う。それを含めて千葉市の文化的状況といえるでしょう。県との関係について、どういう風にお考えなのか伺いたいです。

【丸島生活文化スポーツ部長】

決して仲が悪いってわけではないんですが、文化に関しては確かにおっしゃられるように、協力して一緒の共同事業をやるとか、そういう取り組みはほとんどないんですね。というのは、いわゆる音楽とか演劇ってというのが、県市で共同してやる事業ってのがあまりないといいますが、演奏会やっておわりとか、そういうものが多いので、そうではなくて、たとえば文化振興財団は県の文化振興財団と市の文化振興財団が一緒になって、たとえば子供たちのワークショップをやるとか、そういうのは一緒になってやってますが、単発の演奏会ってというのはわざわざ別に共催しなくてもそれぞれできてしまうので、実際問題、演劇とか音楽はそういう単発の事業が現実的には多くて、そういうものは県市が別に一緒になってやらなくても良いので、現実的にはないですね。ただ今言ったように、育てるようなものについては、事業によっては一緒にやっているものもある。という経緯もあって、年に1回か2回か、文化担当行政の人達が集まって会議があるんですが、現実的にはその程度で、具体的な事業の連携はほとんどないというのが実態ですね。

【椎原委員】

それは大体予想できた回答ですが、やはり千葉市を文化的な都市という質問をすると、県の事業も含めつつ、何かしら県は県、市は市ということ意識しながらも、その相乗効果を狙いつつ、千葉市の文化的状況を考察するべきだというのが、私の意見です。

【丸島生活文化スポーツ部長】

実は昨年、ニューフィル千葉、県の補助金が入ったオーケストラなんですけども、あれを私どもの管理施設である京葉銀行文化プラザをフランチャイズにして使ってください、というような形では今やってます。まだその段階で、具体的に定期演奏会とかをどうするかっていうのはあるんですけども、今はその定期演奏会を習志野のホールでやっているの、その辺はすぐには変えられないってのもあります。こういうのをきっかけとして、県と千葉市、千葉市からすると同じ県の中に入りますので、この辺が上手くやってくればいいなと思っておりますが、こういうのがきっかけになっていくんだろうな、お互いもう予算があまりないので、連携できるものはしてやっていきたいとは思っています。

【神野委員長】

それぞれの組織で閉じた枠ではなくて、境界線をゆるくしながら連携していくということが求められていく時代なのかなという気がしますので、もうすでに市の方でも色々取り組まれていると思いますけど、この施策の中でもそれをさらに発展させていくということがあると、限られた予算の中で千葉市をやっていくことになってくると、そういう視点も必要なのかなという気がします。

【丸島生活文化スポーツ部長】

皆さんが議論されたことは非常に重要なことだと思います。トップをどうするか、団体をどうするか、もちろんすべてできればいいんですが、限られた予算の中で全部をやるっていうのはとても不可能です。ですから千葉市のこの計画の中でどこを重点的にやったほうが良いのか。当然全部必要なのはわかりませんが、全部は無理なので、千葉市はここを厚くしたいっていう議論をしていただけると我々としては大変ありがたい。われわれは重点目標で一番上に「市民主体」をあげているんです。これは何を意味するかっていうと、実は大澤委員のイメージではなくて、もちろんトップの方も、魅力ある人材の活用とか入ってますのでいいんですが、そちらがメインではなくて、もっと市民の方たちが、それぞれが、文化艺术活動をもっとやってもらいたい。市がそこをつつくべきだと思って作ってる骨子案なんですね。

【大澤委員】

私としては、それは今すごい盛んだと思ってます。結局、みなさん趣味の域なので。

【丸島生活文化スポーツ部長】

当然、それをやらなくていいという意見もあると思います。そういった中で、どこに計画を持っていくかっていう議論をしていただければなと思います。

【早川副委員長】

ニューフィルの件ですが、常時あそこに楽団員がいるわけじゃありませんから、その時さっき話したアーティストバンクですか、そういうものから派遣されるとかそういう仕組みになってるわけでしょ。

【市文化振興財団・新井課長】

いや、アーティストバンクはニューフィルさんとはしてないです。

【早川副委員長】

依頼は来ないんですか。

【市文化振興財団・新井課長】

今のところないですね。

【早川副委員長】

じゃああまり連携うまくないですね。

【大澤委員】

逆に連携とか、あるいは一緒についていう窓口が一個、どっかと連携したい人ここに来てくださいみたいな窓口が文化振興課に一個あると、来たのを集約して、データとして取って、じゃあこの人っていうようなことはできるかもしれないですね。

【神野委員長】

たぶん全部のことをやれたら本当は理想的なんですけれども、現実として色々な参加はされているという風に言ったんですが、私はそうは見えていなくてですね、やっぱり遠い人は遠いですし、お友達の中で何かをする後の次のステップがないっていうことも多分大澤委員は問題にしていると思うんですけれども、まずその部分で、自分がやっていることの向こう側にどういう価値があるのかということ、それぞれの市民が自覚をしていったりして、主体的になるためには、トップでものすごく良い演奏を見せる、参加させる、という以外にもやり方がある、ということだと僕は思うんですね。それを市民が求めているかどうかと言うのは、このアンケートではよくわからないっていうのはご指摘のとおりだと思います。今千葉市がそっちのほうを追求していくっていうことはなかなか難しいっていうことを言っていて、多分大澤委員のなかでは、ベルリンフィルを毎年持って来いとかそういうことではなくて、千葉にも一流の人はいるんだっていうことを強調されていたと思うんですけども、その人たちをどう活かすかということだと思うんですね。その活かしかたが、おそらく大澤委員のおっしゃる言い方、プロが、一番上が牽引するという言い方が、ちょっと啓蒙主義的というか、ちょっとカタい感じにとらえられているところもあると思うので、そういう人たちをどういう風に活かすのかっていうときに、さっき私がちょっと整理させていただいた「気軽に」っていうことを千葉市が再定義をしていくっていうことだと思うんですね。その時に、上を切り捨てるなんていうことは当然考えてないわけですから、どういう風に出逢わせるのか、あるいはお金がない中で、申し訳ないけど低廉な予算でやっていただきたいけど、千葉はこういうビジョンをもってやっているのご協力いただきたいみたいなことが、千葉らしさとして定義をされていけば、多分いろんなものが動いていくんじゃないかと思うんですね。そのためには、じゃあそれを実際だれがやるのかっていうことの確認を同時にしながら、次のステップに行きましょうよということなのかなという風に思っております。

【大澤委員】

もって行き方だと思うんですよ。千葉出身の芸術家なら千葉のこと好きなわけですから、その役に立ちたい、プロの方たちは東京で十分お金を稼いでるわけですから、だから千葉の地元になんか恩返しをしたいという思いはみんな持ってらっしゃるので、さっき予算がないって言ってたのはああそのことなのか、と今こちらから聞いてわかったんですけど、高額な演奏料を払わなくても、地元のためだったら来てくださる演奏家はいっぱいいると私は思っているんで、逆に言うとそこのマネジメントができる人材さえいれば、お金がかからなくてもできるんじゃないかと私は思います。

【神野委員長】

それをここでしっかり作っていけたらいい。実演家の立場でご参加いただいている瀬崎さんのご意見も是非とも伺いたいと思うので。すみません、強引に振っちゃって申し訳ないんですけども。

【瀬崎委員】

千葉で長年育ってきた中で感じたのは、ニューフィル千葉なんですけれども、団員が9人の時もあったというような危機的状況、きっと県や市に文化に回すお金がないというのと、反面、音楽を学ぶ者として、千葉って言うのはとても便利なところにあつて、それこそ東京が近いですし、実際に音楽家も千葉に在住の方がたくさんいらっしゃるという現実があつて、そこが縦で東京にはつながっているんですけど、それぞれ千葉ではつながっていないというのが現実にあつて、そこをもう少し活用できたら、千葉っていうのは空港もありますし、海外の方たちもたくさん来ているようなところで、東京にくるいいものをちょっと、たとえば素晴らしいホールがあつたとしたら寄り道してもらえるところにあるのに、なかなか使い勝手がわるいホールしかなかったり、例えば駅から遠いとか、とても古いとか、お客様もここにいてみたいなどと魅了されるような雰囲気のある、アートを感じるような芸術空間はちょっと少ない場所にあつて、そこがもしかしたら千葉に文化が根付かない原因なのかなと思ひながら育ってきましたけど、オーケストラ、たとえば音楽の場合だと、オーケストラをずっと雇う、たくさん的人数にお給料払うお金がないんだとしたら、なにも今ってオーケストラのような100人単位の団体だけが音楽の主流ではなくて、弦楽アンサンブルでいいんだって、もう亡くなられたんですけど、クラシック音楽に厚い、千葉で若手を育てたいという方がいらしたときも、それをすごく提唱されて、若い私のような者をいっぱい支援して、いろんな場を与えて下さった方がいらっしゃるんですけど、そういう予算に見合った中で、よりよい物を、どういう風に潤滑したらいいかっていうことを、千葉の公の方々と市民が手を取り合つて、情報をうまくつなげていくことが大切なのかなと思います。たとえばですけど、子供たちのつてありましたが、音楽鑑賞会、芸術鑑賞会っていうのがどういう実態になっているのか、実際体育館で、学校に芸術家が行つて行われているものが多いのか、それともちゃんと公共のホールを使つてそこに移動して鑑賞されているのかとか、そういう一つ一つの情報を明確に整理していただけると、何ができるのかがハッキリ見えてくるのではないかと。

【神野委員長】

ひとつは、千葉にいる実演家たち同士もお互いの情報を知らなかったりして、繋がつていくっていうチャンスがなかなかなかったりするんで、千葉にしてあげられることが何なのかっていうことがなかなか見えにくい、っていうことですかね。これはこの中で、たとえばオリンピックじゃなくてもいいんですけど、何か一つ目標があると、確かに何かしやすいので、何かそれに向けてアーティストのネットワークを、バンクは登録して、そしてホールの方で依頼をしたりとかっていうことになるんでしょけれど、アーティスト自体がお互いのことを知つていて、新しく何かができるようになってことも重要になってくるんじゃないか。もうひとつは、これはすごく実は本質的な事なんですけど、一番難しい、現状としては難しいのかもしれない、わくわくするっていうんですかね、ホールに行つて。これは千葉市は非常にへたくそですよ。美術館の来館者は来ているけれども、美術館に行つてわくわくするような体験は美術館にはできないですし、こちら辺はなかなか簡単には行かないんでしょけれども、市役所の中にもそういう体験するにあつてわくわくしていくような、そういうような視点っていうのはあつてほしいなと思ひますね。そこらへんは今回すぐに何か解決できるわけじゃないんですけど、そういう仕組みっていうのは必要なような気がします。あとは、最後にご指摘いただいたことというのは、実際にそれをどういう風によくしていくのかっていう時に、意見をもっと言える人がいるということですかね。たとえば実際どういう形で学校で演奏会がされているっていうことが分かつた時に、たとえばアイデアが出せたりというような人たちもいて、じゃあそこはどういう場としてそれを作つていけばいいのか

ってということも課題になっていく。そういう形で何か貢献できることもあるんじゃないかという風に私の方は理解したんですけれども、それで大丈夫でしょうか。

【瀬崎委員】

実際に県の文化会館で行われているものって、全国区で大きな事務所に所属している人がツアーのようにコンサートをするとか、そういうオリジナリティはまったくない企画が97%くらいと言えらるんですね。だからそこをじゃあ果たしてこのまま、ずっとよそのものを買って何も考えない、まあたぶんお役所側の人からしたら一番仕事が少ない方法なのかもしれないですけども、それをずっと続けていいのかっていうことを少し考えたらどうでしょうか。

【神野委員長】

現実の人材とかの中で、考えながらより良くしていく。美術館も巡回展ってのをやっていますからね。その中で自主企画でどう個性を出すかという事が問われていくということと同じなのかなと思います。

【竹下委員】

千葉市の文化度が低いとか、そういう意見も確かに出てくるんでしょうが、捨てたもんじゃないなという意見を最後に言わないと今日夢見が悪いかなと思ひましてね。ひとつ、たとえば金沢市長に話を聞いたことがあるんですが、金沢市が兼六園と野々村仁清の国宝、雉の香炉とお城、この3つの伝統に頼りすぎているというだけでは、金沢はこれからも人を引きつける街にならないというのが市長の意見でね。そこで市長は、21世紀美術館という新しいモダンアートに挑戦するわけですね。金沢もそういう、つまり文化の街についての危機感というようなものをものすごく持って、それで新しいものを開発していく、それがまたヒットをしているというところに私は学ぶべきものがあるって、先ほどからここでお話しをいただいている内容に沿って考えれば、委員長が先ほどから強調しておられるように、どこにスポットを当てて千葉市を育てるべきなのかっていうあたりを、この委員の間でもう少し統一したコンセンサスみたいなものを作っていく必要があるかなって感じがします。千葉市が捨てたもんじゃないというひとつの事例としては、ある研究者に言わせると、千葉が、頼朝が鎌倉の街づくり、都市計画をする原型ではなかったか、それを千葉氏がここで作ったのではないかという、そういう意見もあるんですね。海から直接国道をあがってきて、神社に到達するという街の形が、鎌倉そっくりであるとその人は言うんです。そういう千葉のもつ歴史的な価値というの、どこかスポットを当てていけば捨てたもんじゃないなという気がするんですけども、そういうこともほとんど千葉市民って知らないですよ。

私は小学校の頃、たしかプロの四重奏の合奏団が学校に巡回してきて、それがすごく印象に残って、音楽っていいものだなと感じた人間なものですから、先ほどの大澤さんの言われる意見はごもっともだと思います。若者たちにどういうものを発信していくのかというときに、千葉大に写真学科ってありましたね、国立大学で写真を専門にする学科は一つだったと私の時代には聞いているんですが、写真家の荒木経惟さんなどが出てますけれども、そういう地元の大学が持っている財産を考えると、そういったところから若者についてのメディアアートみたいなものをもっと掘り起こせないだろうかというのを前から考えているんです。そういう地元の財産に何があるのか、色々ほじくり返してみる必要があると思うんですが、大学にも非常に大きな財産があつて、そこを芽にして育てていくっていう姿勢も必要かなと。

そういうところで最初の話に戻りますが、千葉市はいい地の利をもっていて、オリンピックの話でも、

成田空港に降りたら、東京に行く前に千葉によってくれればいいわけですよ。そういう人たちを、まっすぐ東京にバスか電車が出ないで、千葉市に一回寄ってくれて、それから東京オリンピックを見てもらう。そういう観客を増やすための魅力ある何かアート、文化っていうようなものを、これから5年間かけて発信していく仕事は、私自身、夢わくわくという感じがするんですけどね。担当課の皆さんはどうお考えでしょうか。

【早川副委員長】

なんか私が千葉市には文化がないよって言ったことにこだわってるようなんで、そうじゃなくて、文化都市だという前提で計画を作るとするのは、ちょっとそれは飛躍しすぎですよ。この計画の中に伝統的な文化を掘り起こし記録しましょうよとありますけど、大賛成なんです。千葉神社だけじゃなくて、おゆみの城と言ったってみんな何のことかさっぱりわからない。千葉市が始まった時の大椎城の管理なんてのは隣家の農家の方がやっているっていうのが千葉市の文化の伝統の現状です。だからこういうものを見直しましょう、ってのは前回の会議で申し上げたんですね。それから東金街道っていう都町の交差点から右にいったところに、丹後堰公園（たんごせきこうえん）なんてありますけど、丹後堰ってなんですかっておそらくみんなわからない。そういう風にわからないものを、みんな我々は抱えたまんま、文化都市だとか伝統だとか言ってるから、それはもう1からやり直しましょうよ、認識しなおしましょうよ、こういうことですね。それから今の意見と全く違うんですけどね、文化芸術振興計画の中にオリンピック・パラリンピックも入ってきたので、なんで入ってきたと思ったら、発信するっていうんで、大いに発信することはいいんだけど、文化の振興計画とオリンピック、どうやって関係するのかって今もわからない、っていうのが私の本当のところですよ。

【椎原委員】

それはね『オリンピック憲章』には、スポーツと文化の融合が謳われ、「文化プログラム」の開催を義務づけられているからです。ロンドンオリンピックでは、イギリス全土で多くのプログラムが実行され、文化庁にとっても、オリンピックの文化事業は最重要課題の一つになっています。そうすると東京だけじゃなくて、文化プログラムを千葉市も、県との共同を意識して何かしら作っていかないといけないような状況にあるということです。

【早川副委員長】

発信するというのは非常にいいんですけど、今のご意見だと便乗してお客を引っ張ってくるみたいな、いや、基本的な市の方針はそれでいいですよ。経済振興政策としてあっていいんだけど、文化の計画の中にそういう考え方はどうかなっていう風に今現在まだ納得していないというのが本当のところですよ。経済政策とか、全体では当たり前の話で。そういう機会にうんとお客を引っ張ってこなきゃダメなんです。そりゃ全然問題ない。

【神野委員長】

ひとつのきっかけとして、僕らがこの先に千葉市民として何を文化芸術として求めていくのかっていうのがしっかりあれば、ある種、便乗という言葉が良いかわからないんですけど、利用するっていうのはありだとは思いますが。

【早川副委員長】

発信するということなんで、そういう考え方はよろしいんじゃないですかと言ってるんだけど、それがあから振興計画はこうします、っていうのは、本末が逆になってるんじゃないですか。

【神野委員長】

一番下についてるっていうのは、こっちをしっかりと立てようってことですから。で、竹下委員のほうからありました、千葉大の話もあったんですけど、今写真学科はなくてですね、写真の授業はもうないですね。もうあそこの学科は画像のセンサーとかですね、レーザー光線によってどうたらこうたらっていうそういう研究をしていて、みんな情報画像学科という名前になっている。それでちょっと勘違いして入ってきて、全然自分の求めるものを教えてもらえなくて、ノイローゼみたいになる学生がよく僕のところに来ます。写真の授業やってるのはたぶん千葉大で僕だけになっちゃっていて、何を言いたいかといいますと、たとえば海から千葉神社までのっていうお話もさっき出ましたけれども、海は遠くになっちゃってるわけですよ。私たちの活動では、たとえば千葉市民ギャラリーいなげの神谷伝兵衛の別荘をどういう風に市民に知ってもらおうかっていうことで、避暑地の雰囲気を楽しむための短期間のカフェみたいなことをやってたりもします。でも前にあるマンションしか見えないんですね。千葉市自身が、千葉市が持っていた魅力っていうものを切り捨ててきた歴史があるので、やっぱりもう一回ゼロベースでさあ我々は何を大事にすべきなのかっていうことを、先ほど早川委員からもありましたけれども、とらえたうえで、さあ何を活かしていくのかっていうことも再検討しなきゃいけないということかなと思いました。

非常に熱い議論が続いたので時間をちょっとオーバーしてしまってますけれども、とりあえず骨子案について、今いろんな意見を聞くという事でいいですよ。とりあえずはこの骨子案の議論は以上で締めたいと思います。

【古川委員】

これって、骨子案は骨子案で、一つ前の時って、全部細かく事項が書かれていて、今年はどこまで達成したっていう形になってたじゃないですか。あれを作ろうとなさってる？

【高石文化振興課長】

最終的には、個別の今現状行っている事業をぶら下げていくという形になりますね。この骨子をベースに、表現とか、その辺を肉付けして行って、施策として一本一本目標をたてて、それにかかった事業の個別の内容をぶらさげて、振興会議をしつつ、追加の事業がそこに入ってくるということを年度進行で見えていくと。

【古川委員】

前に会議のときに話したことあるかもしれないんですけど、あれに違和感を感じるのは、縦割りがそっくり残っちゃっていて、〇〇区役所はこれやります、〇〇課はこれやります、っていう形のものに全部なってしまうので、ちょっと違和感があって、そこが全然直らないのかなっていうのが非常に気になる場所なんです。それこそ連携する組織みたいなものもできれば立ち上げていただきたいし、あれをまた5年間やるのかなっていうのは正直ちょっと。いかがですか委員のみなさんは。

【神野委員長】

基本的に他の部課がやっている事業も施策の中に位置づけるという形になってくわけですけど、そこに対して、文化振興課のほうで影響力はあまり発揮できないという現実はあるわけですよ。だからそこらへんはどういう風に考えていくのか、つまりこれが決まったらそれに対してそれをどう実行性のある内容に組み替えるっていうことがされていくのか、それは誰が責任を負うのかっていうことだと思うんですけども。これは非常に重要な、市の仕組みにも関わるといえるか。

【古川委員】

またあれと同じものを作るんだと、あまり変わらないような気がしちゃうんですよ。中身のやることは変わるんでしょうけれど、大きな話をしなきゃいけないんだと思うので。

【竹下委員】

ここでこれまで、今日出てきた意見の大勢というのは、総合マネジメントっていうのを誰がどこでやるのかっていうのがすごく共通の見解として出てきたように私は思います。そういう意味で、古川さんが今おっしゃったような、それぞれ担当課ずつに全部振っていくっていうのはなんか違和感があるなっていうのは、もっともだという風に思いますね。この分野についてはどこがだいたい掌握をして、課だけではなくて、先ほど私が申し上げた企業まで目配りをしながら、それを全体として盛り上げていく、っていう仕事をだれがやるのかっていう事だろうと思いますね。そういう形にならないとやっぱり、実際には物事が進んでいかないかなあという、そんな印象を持ちます。

【大澤委員】

今の縦割りの中で、今財団さん来てますけど、実は教育委員会も本当は来て欲しいって私は思う。やっぱり子供の事業は全部教育委員会が仕切って、さっき瀬崎さんがおっしゃったように、学校の芸術鑑賞ってあれ全部教育委員会がとりまとめて、教育委員会から振ってる。で、その学校が考えてる。一番大切な教育の部分、子ども達に一番接しているのは教育委員会であって、今その教育委員会がないので、そこもやっぱり問題かもしれない。

【高石文化振興課長】

基本的にこちらの計画を進めるのと同時進行で、庁内の連携の会議っていうのがありまして、そこにこの内容については諮って行きながら進めていくというところではあるんですが、今おっしゃった組織を一括、統一化してっていうことになるとなかなかハードルが高い部分はあるんで…

【古川委員】

これは私の個人的な意見ですけど、別にあの計画の中に盛り込まなくていいものもあつた気はするんですよ。例えば、区役所がやっている区民まつりは、あそこに入れる必要ない気がするんですよ。そういう意味で、これは大事だなっていうものを絞った上で、そこに広く網をかけて、担当者を作る。それは文化振興という大きな目標に向かっていく、みたいな形ができないのかな。区民まつりは区民のために区役所がやるものなので、そこに文化的要素が入っていたとしても、別に組み入れる必要ないと思うんですよ。

【早川副委員長】

この全体計画を適切に遂行するのは千葉市市民局の仕事ですから。だから当然、市民局の仕事ですから、区民まつりとかなんかも市の行政の中に入ってくる。それを積極的に入れるかどうかはともかくとして、無駄だよとか邪魔だよということはない。

【古川委員】

いらないうって意味じゃないですよ。

【神野委員長】

多分、焦点化した時に、そこまでも中に入ると全体がぼやけてしまう可能性があるんで、どこに焦点を当てるかっていうことで、文化芸術振興計画ではここはもうすごく細かいところもチェックしますよという。

【早川副委員長】

区民まつりはもっと違う要素がいっぱい入ってるから。

【丸島生活文化スポーツ部長】

それは計画の作り方と、それから計画の進行管理、進捗状況の把握をどういったものを対象にしてやるかっていうお話だと思いますけども、それは次回もう一度ご議論いただいて。

【古川委員】

分けて考えるでも良いと思うんです。そういうのを入れるのはいいんですけど、それはまた一つ別個で、これもあります、それも目標を立ててっていいのは良いと思うんですけど。

【早川副委員長】

いずれにしても、当たり前ですが、振興計画ができたならこれを遂行するのは局の仕事であって、局が指示したりどこに任せて行くかっていうのは別の問題ですけど。最後までまとめていくのは局の仕事ですよ。私はそう思いますけど。

【神野委員長】

今回で全て決めるわけではないですので、今回は先ほども話題に出ましたけれども、どこに焦点化するので、ある程度コンセンサスを作る必要があるだろうねっていうこともあったんで、そこらへんの議論は引き続きしていくと同時に、それを実行力のある形で遂行するための体制作りみたいなことっていうのも同時に考えていかなきゃいけない。それは市民局だけではなくて、財団も教育振興財団もありますし、そこら辺を含めて、さあどうあるべきかっていうことも議論ができたらと。よろしいでしょうか。

【大澤委員】

結局この一番最後のオリンピックのプロジェクトって書いてあるんですが、これは市でなんかプロジェクトはあるんですか。

【神野委員長】

これはこれから考えますということを一応言っていて、まだ市の中で、例えばオリンピックの会場を提供するかどうかはまだ決まってないんですよね。ヨットだかボートだかはなくなったんですよねたしかね。その他でレスリングだかがもしかしたらエアレース（？）でやるかもしれないみたいな話もあるけど、それもまだ不確定なので、そこらへんの市の関わり方っていうのもまだ流動的であるということですね。

【大澤委員】

文化プログラムとはまた別ですよ、競技とか。

【神野委員長】

それもそうなんですけど、多分、そういうこともトータルなんですよ。文化だけやって、何も無いなんていうことは難しいと思うので。

【大澤委員】

ただ、文化プログラムっていうのはオリンピック開催の4年前から動き始めるので、なので、もうあと2年しかないっていう状況の中で。

【神野委員長】

だからここで別に今決めなくても良いわけですよ。ここに上っているだけでいいじゃないですか。

【大澤委員】

じゃなくて、これを市はどういう計画でその2年を動こうと思って今ここにこうやってこの議題に載せてきたのかなと思ったんです。先のプロジェクト、どのぐらいの期間にどうしていこうっていう目標があってここにこう載せてきたんだと思うんですね。その計画を聞きたいなと思ったんです。

【神野委員長】

先の計画はまだないんですよね。

【大澤委員】

まったく？一切ない？

【丸島生活文化スポーツ部長】

ないです。今言われたスケジュールしかないです。リオから始まりますので、リオ前はできないんです逆に。やっちゃいけないんで。

【大澤委員】

じゃなくて、考えておかなきゃできないですよ。

【丸島生活文化スポーツ部長】

だから入ってるんじゃないですか。

【神野委員長】

それをやるためには、この基本計画の骨子が決まらなければ、ここら辺の位置づけもできないので、でもここは視野に入れてくださいということで入ってるので、それを先にやることはないということです。

【大澤委員】

ということは、この骨子の基本が決まった、それを全部活かした形でオリンピックのプロジェクトとして動く、っていう千葉の方向だということ？

【神野委員長】

それもまだ決まっていなくて、何かしらやるということは東京都からの依頼も国からの依頼も含めて、千葉市はその枠組みの中には入っているけれども、千葉市がそれをどこまでのレベルでどういうことをやるかっていうのはまだ決まってないわけですよ。

【大澤委員】

じゃあ逆に言うと国からそれが降りてくるのはいつなんですか。それで千葉が判断するのはいつなんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

それもわかりません。それだと遅いんで、みんな単独で動いています。千葉市も千葉市で、総合政策局が今中心となって、オリパラの推進本部を作って、もう来週あたりに基本方針みたいなものを出します。出しますが、でもみんなこんな粗々のものです。全然決まってないので。

【大澤委員】

次回の会議が6月、その時にはその方向が出てるといことなんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

方針だけは出てますが、方針だけですので、例えばその中に当然文化も入っております。文化プログラムやりなさいね、そんなもんです。今は。

【椎原委員】

オリンピック関係の資料は、現在では様々なところに出回っているような資料しかないと思いますが、これから、いろいろ資料をお集めになって準備してください。

【大澤委員】

一応来週、ご案内を差し上げたと思うんですけど、文化庁が主催の、ロンドンオリンピックの方たちが来るのが上野でありますので、もしご興味ある方はいらしてください。

【丸島生活文化スポーツ部長】

その辺の情報はみんなもちろん収集してます。いろんな情報は集めてますが、今は表立って動けることはない。なので、当然千葉県も動いてますし、県と市がどうするんだっていう議論もしてます。同じエリアで重なりますので。県だけではなくて、九都県市の問題もありますし、幅広い話はしてますが、具体的にはリオ以降じゃないと動けないんで、今は。

【大澤委員】

それとちょっと重なるんですけど、瀬崎さんがおっしゃったように、ホールがないって言った中で、今40年経ってる千葉市民会館とか色々あるじゃないですか。建て替えについて熊谷市長がなんか言ってますよね。その駐車場がなんだっていう案を出してたりとかしているんですけども、でもあと6年あるわけで、もし建て替えるのであれば、それも可能だったりするじゃないですか。そういうハードの部分も含めて全部動いてくれたら嬉しいなと思うんです。オリンピックにも向かうんであっても、その一つで利用はできるじゃないですか。もし建て替えるのであれば。

【丸島生活文化スポーツ部長】

ハードは別にやります。来年度予算で、ホールの基礎調査の予算を付けました。なので、新ホールに向けて、来年度から調査をはじめたい。ただ、オリンピックには全く間に合いません。ホールを作るにはすごい金額がかかりますので、優先順位がありますので。全く間に合いませんね。

【神野委員長】

じゃあちょっと長くなって本当に申し訳ないです。

続きましてその他、千葉市文化芸術振興事業補助金交付事業の実施報告について、事務局の方から願います

<事務局説明②>

【神野委員長】

これは以前椎原委員の方から、やはりできるだけ見に行ったほうが良いんじゃないか、というお話があったので、できるだけ見に行けるような対応で行きたいと思います。これはつつがなく終了しているということですね。

それでは、本日の議事はすべて終了ということになりました。非常に時間が長くかかってしまって、つたない議事進行で申し訳ありません。それでは事務局にお返しします。